講演記録

究極のごみゼロ社会を目指して
－資源回収法を制定して持続可能な社会を－

笠 松　和 市（徳島県上勝町長）

「おばあちゃんの葉っぱビジネス」で知られる徳島県上勝町は、人口約2,000人、高齢化率48%という山間の小さな町です。この上勝町が、2003年９月19日に日本の自治体で初めて「ごみゼロ（ゼロ・ウェイスト）宣言」を行いました。2020年を目標に、焼却・埋め立てごみゼロを目指して立ち上がったのです。

神奈川大学国際経営研究所では、環境問題、ごみ問題が21世紀を通じてきわめて重要な課題であるとの認識から、上勝町長の笠松和市氏を招いての特別講演会「究極のごみゼロ社会を目指して」を開催しました。以下に、平塚商工会議所との共催により2007年11月29日に平塚市中央公民館で行われた基調講演と、その後のパネル討論、アンケートに示された来聴者の質問とパネリストの回答を紹介します。

1　21世紀は地球環境の世紀

今日は地球環境のこと、そしてわたしたちのいちばん身近な環境問題であるごみ問題について、皆さんとご一緒に考えてみたいと思います。大気とか水、土壌をいかに汚さないで次の世代に引き継いでいけるか、「究極のごみゼロ社会」がどうすれば実現できるのか、提案をさせていただきたいと思います。

21世紀は地球環境の世紀と言われています。何がいちばん問題かというと、地球温暖化の問題です。ことし（2007年）のノーベル平和賞は、アメリカのアル・ゴア元副大統領と、IPCC（気候変動に関する政府間パネル）に授与されました。ゴアさんは『不都合な真実』という映画で、地球温暖化による危機が差し迫ったものであることを訴えました。IPCCというのは190ヵ国、450名以

上の専門家たちで構成する学術的な機関ですが、地球温暖化に関する科学的な裏付けを与えた功績が評価されたのです。

国連の潘基文事務総長も、国連でいちばん大きな課題は地球温暖化問題であると言っています。さらに安倍前総理も、ことしのＧ８で「美しい星」ということを提唱しました。８ヵ国の首脳が、2050年までに二酸化炭素など温室効果ガスの排出を現状の半分以下にしようということを真剣に検討したいということで、来年（2008年）７月の洞爺湖サミットにつなげようとしています。

地球温暖化ということが、わたしたちにとってほんとうに大事なことになっています。しかし、まだピンと来ていないのか、日本も京都議定書では2008年から12年までの5年間に、1990年の温室効果ガスの総排出量のマイナス6％にするということを国際約束していますが、残念ながら現状は2005年度で逆に6.9％、約7％増えているのが実態です。今からですと13％も削減しなければならない、来年（2008年）から５年の間に。できるでしょうか？　ドイツでは、すでに18.4％、1990年レベルから削減しています。イギリスも約15％削減している。アメリカは逆に16％あまり増えているという状況です。

皆さんにぜひ考えていただきたいのは、いまから50年前、この平塚市でも真冬には氷とか霜柱があったと思いますが、いまはどうでしょうか？　氷が張る日、霜柱が立つ日はほとんどないのではないでしょうか。わずか50年の間に、これだけ真冬が暖かくなってしまったのです。北極や南極の氷が溶けていると言いますが、身近にこれだけ温暖化が進んでいるわけで、これから50年したらいったいどうなるのでしょうか。

先進国は、これまでテレビや携帯電話などを次々と開発してきましたが、開発途上国である中国やインド、インドネシアなどでは、そうしたものを開発するための長い時間が要りません。開発資金も要りません。世界の最先端の技術や資本を一挙に手に入れて、安くて良い製品をどんどん作ります。それが、さらに世界中に行き渡っていきます。すでに中国では、自動車の新車販売台数は世界一となっています。これらの開発途上国は人口も多く、なおかつ面積も広いということですが、これらの国々が一挙に工業化を進めていきます。地球の温暖化は、これまでよりもはるかに早いスピードで進んでいくと考えなければなりません。

これまでの100年間で、地球全体の平均温度は0.74度しか上がっていない。ところが、東京では3度も上がっています。徳島市では1.6度です。ニューヨークでは1.5度上昇していると言われます。IPCCの予測では、今後100年間に1.1度から6.4度上がると言われています。そうなると、東京や、あるいは平塚は、人間の住む環境でいられるんだろうかということで、都市部こそ危機的な状況になるのではないかという気がしています。

2　ごみ焼却で大気汚染と温暖化に拍車

私たちにとっていちばん身近な環境問題は何かというと、わたしは空気ではないかと思います。空気は、身体じゅう触れていますし、人間ならだれもいっときも欠かさず吸うたり吐いたりしています。それに３分の２以上火傷をすると、皮膚呼吸ができなくなるので死亡すると言われています。そのようにいちばん身近なのは空気です。ところが、そのいちばん大切な環境である空気をみんなが汚している。この空気を汚しているということに関して言えば、日本では平成16年でなんと２兆円もの税金を使って、物を集めて、燃やしてしまって、大気汚染と温暖化を同時に進めているのです。

もうひとつ別の角度から考えてみたいのですが、わたしたちにとっていちばん大切な物、それは何でしょうか。わたしも戦後生まれですが、お金が欲しい、利便性が欲しい、物が欲しい、これ３つ、それぞれ追求してきた結果、人は都

笠松和市氏の略歴：1946年徳島県上勝町生まれ。徳島県立農業高校を卒業後、64年より上勝町役場に奉職、企画室長などとして活躍。2001年には多くの町民に推され、無投票で町長選挙に当選、現在は2期７年目。徳島市から車で1時間、人口2048人、高齢化率48％という山あいの過疎の町でありながら、「おばあちゃんの葉っぱビジネス」で年商2.6億円に達するなど、意欲的な取り組みで全国的な注目を集める。
2003年9月に日本の自治体で初めて「ゼロ・ウェイスト（ごみゼロ）宣言」を議会で採択。「地球を汚さない人づくりに努めます！」「ごみの再利用・再資源化を進め、2020年までに焼却・埋め立て処分をなくす最善の努力をします！」「地球環境をよくするため世界中に多くの仲間をつくります！」の3つを合い言葉に、精力的な取り組みをつづけている。内外の視察見学者は年間約4000人に達し、人口1人当たりの視察者数では世界一という。

会へ都会へと寄っていきました。そして、何がおかしくなったかというと、わたしたちの健康なんです。昨年の統計によると、公立の小中高の先生のうち約４千人が、躁鬱とか精神疾患で休職されている。それから国家公務員で１千百何十人の方が精神疾患で入院しています。大学を出て教職課程を受けて先生になるということは、なかなかできません。それが、公立学校だけで４千人もの方々が病んでおられる。このように、健康を害されている方がほんとうに多い。しかも、これ、目に見えないんです。外傷ですと、足や手を怪我したりして目に見えますが・・・。家族の方もほんとうに大変と思いますよ。

健康がいちばん大事であるにもかかわらず、お金とか物とか利便性だけを追い求めているのではないか。その結果、日本は、世界一いろんな物資を輸入していますが、こうして輸入した物はみんなごみになるんですね。ごみも貯まれば山となると言いますが、山のように積んでいるごみ、一般廃棄物だけで年間5千万トンあります。そのうちの８割、４千万トンを焼却、埋め立てしています。つまり、目に見えないごみにしているのです。だから、いくら綺麗になりましたからと言って、実態はその裏側は汚れ、目に見えないようにしているだけなんです。しかも、その瞬間に、資源では無くなります。資源が何になるかと言うと、大気汚染になるんです。よくダイオキシンと言いますが、ダイオキシンのみならずいろんな化学物質が排出されています。

地球温暖化という人類の最大の課題に対して、日本は煙突の数が世界一多くて、せっせと焼却を続けている。こういうことでいいんだろうかということも、皆さんと一緒に考えていきたいと思います。

地球温暖化のお話をしましたが、スクリーンの写真は50年前の上勝町です。子どもたちが雪合戦を楽しんでいます。そして、この氷柱を見てください。中学生が、身長を上回るようなこんな巨大な氷柱を持っています。ところが、最近ではこんな氷柱を見かけることはありません。氷が張ったり霜柱が立ったりという真冬日も、上勝町ではほとんどなくなりました。これが、わずか50年の変化なんです。

3　「持続可能な町」を目指して

地球がいまどういうふうになっているのかということですが、皆さん、ゆでカエル現象というのをご存じでしょうか。20匹とか30匹のカエルを大きな鍋に入れて、１週間とかかけてじっくり煮詰めていくと、みんな死んでしまいます。ところが、一気に煮ようとすると、サッと飛び出て助かります。今の地球の温暖化は、じわじわ何十年もかけて、50年、100年かけて暖かくなるんです。そのため、みんながぬるま湯気分でいて、最初は身体の弱い人だけが病人になります。ことしの夏も西日本では猛暑日がつづいて、32名が熱中症で亡くなりました。そのように、身体の弱い人から亡くなっていきます。地球温暖化が、健康を害するということですね。人間が、ゆでカエルなんていうことにならないようにしなければなりませんね。

どうしてこういうことになるかと言うと、日本はアメリカに次いで世界第二の経済大国です。ところが、少子化が急激に進み、世界でも例を見ない借金大国ですね。いま、国だけで国民ひとりあたり680万円もの借金を抱え、しかもどんどん増えています。その上に、自殺者が年間３万人を超えている。それから、100歳を超える高齢者が２万５千人を超えています。日本というのは大変な状況になっていますが、借金をしながら、行政もズルズル行っている、ということです。なぜそのようになるかと言うと、１つは、皆さん、国家目標というのをご存じでしょうか。日本の国家目標です。日本の国家目標をご存じの方、手を挙げていただけますか？　いらっしゃいませんか。ご存じないはずです。国家目標がないのですから。

ところが、皆さんの市町村には、基本構想とか長期計画と呼ばれるものがあります。しかし、この長期計画というのは、わずか10年です。10年が長期計画で、３年ごとにローリングして見直しを行っています。そんなことでいいんでしょうか。

上勝町では、平成元年から３年にかけて新しい長期計画を立てました。ところが、あっという間に10年経ってしまって、いままた新しい計画を立てましたが、ほんとうにこんなんでいいんだろうか、という気がしてなりません。

いま、上勝町でどんなまちづくりをしているかというと、上勝町は四国の徳

島市から１時間くらいの山の中の町です。勝浦川という川の最上流です。山の中ですから、平地というのがありません。面積は109平方キロメートルで、人口はわずか２千人ばかりです。高齢化比率は48％に達していますが、75歳以上の老齢者医療費は平成18年度徳島県内でいちばん安いんです。元気なお年寄りが多いということです。

町の棚田は美しく、たまに訪ねるにはいいところです。しかし、問題は後継者がいないのです。これらの棚田を所有して耕しているのは、ほとんどが65歳以上の人たちです。寄る年波には勝てないと言いますが、いくらやる気があっても、いつまで出来るかわかりません。

「日本で最も美しい村連合」というのが、平成15年10月に出来ました。菓子・食品メーカーとして知られるカルビーの松尾雅彦会長（現取締役相談役）が提唱してくださって、消えてはならない農山村の風景とか文化とかが２つ以上あって、それを残すという熱意のあるところを応援しようということで生まれた会で、上勝町も加盟させてもらっています。

今回の長期計画を考えるとき、どんな町にしたらいいのかと、いろいろ議論をしました。そのなかで、21世紀のビジョンとして、「持続可能な町」にしようということを考えました。持続可能というのはどういうことか言うと、将来世代との公平性ということです。今の世代がどんなにいい生活をしても、次の世代が困るようであってはいけない。いちばんは地球環境の保全という問題であり、地球温暖化という問題です。今のような状況で、どんどん科学が発達し、工業化が世界で進んでいくと、エネルギーは使います、物資は使います。そうすればどうなるか、物資が不足します、値段が高騰します、紛争が起こります

ということで、いい状況にはなっていかない。非常に大きな課題です。

人間と他の生物の共生という課題もあります。日本は、何千年の歴史の中で初めてのことが起こっていることに、気がついていますか。猪や鹿が農地とか人家のところに出てくるのは当たり前ということになっていて、ニュースになるのは人里に出てきた熊が人間を襲ったときくらいです。何が問題かというと、動物のえさ場がなくなっているのです。ここ3、40年くらい、雑木林も人工林もほとんど皆伐はされていません。だから、他の動物の生存の場がどんどん減っているのです。そして、日本の国内にこれだけ木材がありながら、必要な木材の82%までは海外から輸入されています。ところが、先だってもフィリピンの方に伺うと、フィリピンでは半分以上がはげ山になっているそうです。国有林は伐採禁止ということになっているにもかかわらず、不法伐採が続いているというのです。他の動植物と人間が共生できるように、木も何百年というサイクルで次々と計画的に切っていかないといけない。そうしないと、木陰に下草が生えず、いろんな動物のえさが出来ない。もちろん、人間が食べる山菜も、山には出来ないというのが日本全体の最近の状況です。それと、私たちが生活する上では、何と言っても安定した経済と雇用が必要です。しかし、次の世代に取り返しのつかない環境のツケを残しているのではないでしょうか。

4　葉っぱビジネスを支える情報

次に、情報の発信と直接交流という問題です。21世紀は「情報の世紀」ということが言われています。情報はいま、一瞬にして世界を駆け巡ります。経済も世界レベルで回っていますから、国内だけで考えていてはいくらやっても経営が成り立たないという時代になっています。いい情報をいかに発信するかということですね。日本では悪い情報がどんどん流れていくために、悪知恵ばかりがついているようです。それと、直接交流によって、よい人づくりをしなければならない。こういう考えに沿って、現在の上勝町のまちづくりを進めています。

都会は鉄とコンクリートの塊で出来ているので、季節感が乏しい。春には桜の花とか、秋が来たら紅葉を出すということで、葉っぱビジネスによって、料

理を食べながら四季感を楽しんでいただく。こういうことで、葉っぱの提供がビジネスとして成り立つようになってきた。田舎には十分ありながら、都会では不足している、そういうものを出荷させていただいてビジネスとして成り立つ、こういう時代になってきた。

なぜ、こういうことが出来たのか。これも情報です。市場、JA（全農）、町の第三セクターとして設立された株式会社いろどり、生産者とありますが、相互に情報がうまく伝わらないといけない。上勝町では、関係者のあいだで全国でも初めて無線FAXを利用しました。行政防災無線を使っています。190戸くらいの農家に、一瞬にして情報を送るシステムが10年ほど前から出来ています。いまは、パソコンを使っています（写真上）。去年まではNTT回線を使っていましたが、いまは光ファイバーを使ってやりとりをしています。仕組みがうまく出来ているのです。扱うものがナマのものであるいうことですね。紅葉のパックが1つあったらいいところに２つ送ったら、１つはごみになってしまいますね。ですから、必要な人に、必要な数量を、必要な時に送り届けるということが大切です。全国から多くの方が視察に来ていますが、ほとんどのところが真似ができていない。問題は、この情報ネットワークにあるのです。

行政としてほんとうに助かっているのは、経済というよりも、高齢者の生きがいと健康増進に役立っているということです。高齢者のパソコンには、高齢者用のマウスを使います。それに、葉っぱを採りにいくには身体を動かさなければならない。これが、高齢者の健康に非常に役立っているんですね。その結果、医療費も少なくて済むということで、65歳以上の高齢化比率が48％と、徳島県内でもいちばん高いにもかかわらず、老人医療費は24市町村中いちばん低くなっています。医療費が最も高いと町との差は、年間ひとりあたり32万円にも上っています。もし、そこと一緒だとしたら、上勝町の老人医療費は年間１億9500万円、今より余計にいるということになります。日本全体の高齢化が進んでいますが、高齢者がいかに元気でいろんなことをして頑張ってくださるか

ということが、医療費の削減にも密接につながるわけですね。

写真（右）は、ことしの夏の上勝町の山の様子ですが、日本ではほとんど樹木が切られていません。こういう状態で、動物のえさがあるでしょうか。ことしの２月に菅義偉総務大臣が来られた折、この山の中を２キロ歩いていただきました。説明は要らないんです。歩いただけで、これを放っておいたら大変なことになると、わかっていただきました。

谷川では、流木がそのまま放置されています。次に台風が来て大雨が降ると、どさっと一帯が荒れます。そうして何十億円という被害が出たら、これが治山事業と呼ばれる大きな事業になります。大切なのは、いかに未然に防止するかということではないでしょうか。

写真のような山で、他の動植物との共存ができるわけがありません。間伐をぱらぱらしても駄目なんです。５年か10年すると、すぐ上を覆ってしまうんです。草は生えません。生えかけても、動物がすぐ食べてしまうんです。ばらばらと、小面積で皆伐をしていかないと駄目なんです。

木材の値段が、この10年でほんとうに安くなってしまい、37％も下落しているんです。上勝町には月ヶ谷温泉という第三セクターの温泉がありますが、昨年重油ボイラーからチップボイラーに切り替えて、未利用材をそこで活用するようにしました。これによって、年間323トンの二酸化炭素等の削減が実現しています。小学校には薪ストーブを設置しました。子どもたちに薪を切って来てもらって、これを燃やしています。子どもたちに対する環境教育につながっています。

5　生ごみは100％堆肥化、残りのごみは34分類

ごみの削減ですが、従来は野焼きと小規模な小型焼却炉を利用していました。今後どのようにしたらいいのかと、リサイクルタウン計画を立て、最初にごみ

の分析を行いました。まずは、生ごみをシャットアウトしようと考えました。生ごみをシャットアウトすることができれば、残りのごみの資源化は非常にしやすい。今では、生ごみはほぼ100%堆肥化しています。残りのごみは34種類に分別していますが、分類箱にはそれぞれがリサイクルされてどのようになるか、はっきりと表示しています。

各家庭でごみをいくつかに分別しますが、ペットボトルなどはさらに蓋やラベルを外して分類しなければなりません。それについては、日比ヶ谷（ひびがたに）というごみステーション（写真下）に持って行った折に区分けします。毎日、午前７時30分から午後２時まで、年末年始を除いて、ごみステーションで受け入れを行っています。上勝町にはごみ収集車というのがありませんので、各自がここに運んでくるのです。スーパーマーケットでいろいろな物を買い揃えるのとは逆に、ここではみんながそれぞれに分けて置いていくんです。子どもの教育にも、ほんとうにいいと思います。夏休み中にも、いろいろな人が見学に来てくれています。上勝町の子どもにごみの絵を描かせると、それぞれに分類したような絵を描くんですね。環境教育にもほんとうに役立っていると思います。

上勝町では、生ごみを除いて、70%のごみを資源化しています。生ごみを入れると80%を超えます。オロナミンCなど、１回飲むとポッと捨てますね。上勝町だけでも大変な量になります。中身より容器のほうがエネルギーが余計にかかっているのではないかと思いますね。この瓶を溶かして再利用しても大変なエネルギーが必要になるんですね。

「くるくるショップ」（写真右上）と呼ばれるリユースのお店があり、真っさらのような物がたくさん並んでいます。今は、必要と思う人に無料で、協力金だけ納めて持ち帰ってもらっていいというようにしています。文具や洋服、靴など、まだまだ綺麗な物がごみとして出されるんですね。それらを別の人に有効に利用してもらえるようにしているんです。平塚でこういうことをすれば、膨大な量が集まるんではないでしょうか。

ごみステーションに隣接した「くるくる工房」（写真右下）では、高齢者の方々が、不要になったいろんな布や端布を、新しい物に作り替えています。いま私が羽織っているのも、元は鯉のぼりだったんです。それを、高齢者の方が頭を使って、細かな手作業でこうして皆さんの前で私が着れるようにしてくれたんです。ごみとして燃やしませんから、大気汚染の防止にも役立っていることになりますね。高齢者の方々のいきがいにもつながっているわけで、ありがたいことだと思います。大きな縫いぐるみもありますが、この中には打ち直した布団の綿が入っています。

6　日本のリサイクル法は悪法

上勝町では、2005年に「ゼロ・ウェイスト宣言」をしました。ゼロ・ウェイストというのは、本来無駄や浪費を無くそうということですが、１つには地球を汚さない人づくりに努めます、２つ目にはごみの再利用、再資源化に努め、2020年までに焼却・埋め立て処分を無くせるよう最善の努力をします、３つ目には地球環境を良くするため世界中に多くの仲間を作ります、という３つの宣

言をしました。

ごみに関する現行の法律の問題点は何かと言うと、私は明快に悪法と呼んでいますが、廃棄物処理対策なんです。日本という国には目標がないと先ほど言いましたが、経済対策とか雇用緊急対策、児童虐待防止対策と、みんな問題が出てきてからの目先の対策なんですね。現行法では、２兆円の税金を使って、資源を一瞬にして無くして、大気、土壌、水を汚染し、地球の温暖化を進めているんです。地球環境のためにしてはならないことを、莫大な税金を使ってやっている。ここに、発想の転換がいるんではないかと私は思います。

不法投棄が各地で起きていますね。各種リサイクル法をみんな悪法と言っていますが、見つからないで捨てると得をするという仕組みになっているんです。だから、ペットボトルも捨てます、電気製品なども捨てます。たとえば電気冷蔵庫を山の中にポンと捨てると、１つで6800円も儲かるということになりますから、家電リサイクル法も悪法と言わなければなりません。逆なんですよ。冷蔵庫1つ持って行くと500円くれます、あるいはペットボトル１つ持って行くと５円くれます。今のビール瓶のように、１本５円ですが、コンテナーは１個200円です。１箱持って行くと300円もらえます。ですから、捨てません。それに、コンテナーは何百回も行ったり来たりして、最後使えなくなった物が初めてリサイクルされる。今の悪法を、よい法律に転換しなければなりません。

私は、資源回収法という法律を新たに作って、消費者が不要になった場合、すべて商品は有価で回収する。有価で回収できない物は、製造も販売も禁止ですよと、設計段階から商品は再利用できるようにする。再利用できなくなった物は、リサイクルをする。そういう良い知恵がどんどん出てくるような商品を作っていく。こういう法律を作って、施行年度は、たとえば容器類は2015年からといったふうに、各業界と政府、消費者団体などが協議して決めていけばよい。施行されれば、ごみは出なくなります。

ものすごい効果があるのは、煙草です。煙草の火の不始末による火災は、放火の次に多いんです。もし、煙草の吸い殻に１個10円という値段がついていたらどうでしょうか。多分ほとんど捨てないで、消して持って行くと思います。20本あれば200円に替わります。仮に捨てられていても、子どもなどが拾って持って来てくれるということで、町は綺麗になりますし、年間100億円にも及

ぶ火災の被害が大きく軽減できるはずです。火災で不幸に見舞われる人も、うんと減るのではないでしょうか。

こうしたことを推進するために、上勝町では「ゼロ・ウェイスト推進基金条例」に基づく基金を設けています。町の税金を使ってはなかなかできませんから、基金で皆さんに協力をお願いしているのです。2005年４月には「NPO法人ゼロ・ウェイストアカデミー」を設立して、それを中心に、国内や世界に広めていこうと取り組んでいます。この後のパネル討論に登壇する松岡夏子さんが、大学を出て間もないのですが事務局長として活躍しています。

7　ごみ発電所も悪循環社会

先ほどから、悪法、悪法と呼んで申し訳ないのですが、日本は一生懸命やって悪い方向に行っているんですね。2003年でしたか、三重県のごみ固形燃料発電所の貯留サイロで爆発事故が発生しました。８月末に爆発したのですが、11月に環境部長が上勝町に来られて、いろいろお話ししました。消防士がふたり亡くなられて、消防士も大変なんです。火事場に行ってもなかなか突っ込めない。精神的なショックを、ものすごく受けているんです。本人も、家族も大変なんです。それに、ごみを固形化して発電所の燃料にしようとしていたRDF（固形化ごみ）がどんどん出来てくるが、それを燃やす発電所が動かせなくなった。どこに持って行って処理をしてもらうか、たいへん困っているとおっしゃっていました。

ごみ発電所を作って循環型社会などと呼んでいますが、あれでは頭に悪が付いて悪循環型社会ですね。資源を一瞬にして燃やしてしまっているんですから。電気にしても、電気は一瞬にして無くなってしまいます。御殿場市もRDF製造施設を動かしていますが、３年ほど前に上勝町に来られた折、出来たＲＤＦどうしているんですかと伺うと、山口県の宇部産業まで持って行って燃やしているというお話で裁判になっているそうです。このように、ごみ行政はどこでも大変な問題を抱えています。

上勝町も、いま全体の20％くらいのごみを焼却しています。当初は山口県まで運んでいって、燃やしていました。そして、最終処分場は島根県でした。現

在は、徳島市内の民間業者に焼却してもらって、松茂空港沖の最終処分場組合に加盟して処分しています。それで当初より割安になりましたが、最初は1コンテナーが17万円もかかりました。とにかくごみ処理にはお金がかかるんです。お金をかけて、しかも資源が一瞬にして無駄になって、大気汚染にもつながる。正に、悪循環なんです。こうしたことをいかに良い循環に変えるか、これが私たちに課せられた最大の課題ではないかと思います。

8　コネット博士の提言を受けて「ごみゼロ宣言」

いま、皆さんもいろいろな下着を着ておられると思います。これ、ボロボロになるまで着る人は、誰もいませんね。たぶん、何回か着たら、新しい物に変える。私も、町長になってから、ズボンも何もかも合わなくなって全部替えました。こうしたことで、まだ着ることのできる新しい物が、次々と燃やされています。

先ほどお話ししたとおり、日本が輸入した物は結局みんなごみになるんです。その際、目に見えないようにしたらいいということではないんですね。アメリカのポール・コネット博士（ニューヨークのセント・ローレンス大学教授）が上勝町に来てくださった。日本は世界一煙突の数が多くて焼却量も多いということだが、どこかいい町はないかということで、上勝町に来てくださった。その時に提唱いただいたのが、このゼロ・ウェイスト宣言なんです。私は以前から2030年にはと思っていたのですが、コネット博士が他の都市と同じ2020年に合わせて欲しいということで、ちょっと無理かなとも思ったのですが、町議会とも相談の上決めました。

皆さんのところも、ぜひ市長さんともご相談いただいてゼロ・ウェイスト宣言をしていただければ嬉しいと思います。きょうも会場に町田市の方がお見えですが、町田市も市長が代わられて、市民の方々がごみゼロ宣言をしたいと、すでにくるくるショップ的なものを始めておられる。この平塚市で始められたら、新品のようなものがごみとしてたくさん出てくるのではないか。それと、各家庭のタンスの中で結構眠っているんですね。使える物、新しい物がたくさんあるはずです。そういった物が、必要な人の手に安く渡るようになる。上勝

町のくるくるショップでも、たとえば私がふだん使っているコーヒーカップよりはるかにいい物が並んでいる。それが、先ほどお話ししたように、協力金だけで、ただで手に入ってくる。そういうことができれば、生活保護世帯のような方々も、低所得者の方々もよほど助かるのではないかと思います。

タンスの中では、皆さんずいぶん価値のある物を眠らせているんですね。ぜひそうした物を、必要な方の手に渡るようにしていただきたい。そうすれば、家の中もずいぶん広く使えるようになるはずです。

きょうの集まりでも資料がありますが、これもごみになります。要らないと思ったら、きょう自宅に戻ったらすぐごみなってしまいます。ところが、先ほどお話ししたような資源回収法が出来ると、たとえば紙類についても2020年から有価で回収しなさいと罰則規定まで出来ると、必ずいい知恵が出てきます。たとえば、ホッチキスを外して紙をある機械に通すと、インクと紙とに分かれて出てくる。紙は真っ白なペーパーになって出てきて、また使える。インクはインクとしてまた使える。そういった凄い技術が出てくることが期待される。ただ、そうなると、製紙業界には厳しいですね。しかし、エネルギーコストも、原料コストもどんどん落ちます。

衣類にしても、もう一度糸や原料に戻して、また紡ぎ直すこともできる。そうなれば、現在のようにどんどん外国から物を買わなくても済むようになる。足りない物だけ買えばいい。最終的には、ほんとうの不足分だけ外国から買えばよい。そういう状況になるのではないか。これは政策ですので、いろいろな業界のことも考え、ある物は2020年とか2030年、ある物は2050年からということにしないと、業界の反対にあって前に進められないでしょう。

こういうことを絶対にしなければならないんです。なぜかと言うと、世界の人口は65億人と言われていますが、そのうち先進国は１割、６億５千万人くらいに過ぎない。世界の人口の９割は開発途上国で生活しているんです。これらの国々が経済発展していくと、ものすごいエネルギーを使うようになります。先進国は、現在の温室効果ガスの９割を削減しなければならないということを、ゴア元アメリカ副大統領が言っていますが、それだけの削減ができますかということなんです。先進国がそうした大幅な削減をしないと、開発途上国と必ず摩擦が起こります。物が不足して価格が上がってくると、お金がない国は買え

ません。そうなると、暴動なども起こるでしょう。資源もエネルギーも最小必要限度にできるように、よい知恵を生み出していかないといけません。

エタノールが利用されるようになって、とうもろこしの値段が高騰しています。飼料価格が高騰して、日本の畜産農家もたいへん困っています。しかし、これは序の口だと思います。とうもろこしの値段が上がって困るのは、ブラジルなどでとうもろこしを生産するのに、森林を伐採して畑にしていることです。温室効果ガスの吸収をしなければならないのに、逆に樹木がどんどん切られている。だから、どうしても資源の再利用を図り、エネルギー消費を抑制していかないといけない。

資源の再利用、再々利用を図り、しかもコストを下げるということが必要です。そうすれば、そんなにお金儲けをしなくても、働かなくてもいいということになる。今は、せっせせっせと働いて、一生懸命やって、エネルギーを使って、資源を使って、大気汚染をして温暖化を進めている。

この前、安倍総理もインドなどを訪問して３つのことを言った。１つは貿易を拡大しましょう、技術移転をします、地球温暖化防止にご協力ください。しかし、貿易拡大は、即日本の農林業の衰退につながります。たとえば、貿易拡大のためにマンゴーや他の食品が入ってきました。日本人の胃袋は同じです。マンゴー等が入ってきた分、日本の農家が生産するりんごやみかん等の消費が減ります。それに、こうした輸入の拡大には輸送のために大きなエネルギーを消費します。

技術移転の結果、向こうで自動車や携帯電話等を作ります。そうすれば、非常に便利になります。しかし、その分、資源を使い、エネルギーを使います。その結果、みんなが一生懸命やって、資源やエネルギーを消費し、またごみを増やしてしまいます。そう考えると、携帯電話にしても、最初から部品を一部換えれば何年も使えるようにしておく必要がある。

青色発光ダイオードの開発で知られる日亜化学工業は、徳島県阿南市にある会社です。その日亜化学から、記念品に電池をいただきました。なんとこの電池、１千時間使えるというんです。この電池があれば、私はもう一生電池を買わないで済むことになります。こういうような製品が出来て、何十回も何百回も繰り返し使えて、最終的に使えなくなった物がリサイクルされる。そんな知

恵が、至るところに出てくるのではないか。そういうことによって資源は最大限に生かされる。リサイクルにも、結構エネルギーが必要なんです。だから、ペットボトルにしても、もっと厚い物にして、何回も何回も使えるようにしたらいいんです。形も何種類かだけにすれば、コストもそれほど高くならないで済むと思います。

日本は法治国家ですから、法律に従わなければなりません。今のような法律のままだと、税金を使って資源の浪費や大気汚染を推し進める結果、取り返しのつかないツケが将来に残るようになってしまいます。

来月には長野県の白馬村と千曲市に講演に伺います。白馬村も、周辺の市町村と一緒に大型の焼却炉を作っている。そこでもきょうのようなお話をさせていただきますが、この焼却炉を作ると後始末がまた大変です。結構、お金がかかります。いずれ寿命が来ますので、何年かしたらまた作り直さなければいけない。ほんとうに悪循環社会と言っても、過言ではない。これを良い循環型社会に切り替えるためには、ぜひ資源回収法を制定しなければならないんです。東京の日野市長も、全国都市清掃会議の基調講演でおっしゃっていますが、480億円から490億円の年間予算のうち、毎年30億円をごみ処理に使っています。しかも、その額が増えていっていますと。これを教育や福祉に使えたらなと、言っておられます。しかも、昭和の人間は一生懸命働いてくれて便利になったけれど、こんな取り返しのつかないツケを残してくれた。こういうことを言われて死にたくはない、とも言っておられる

2005年12月の全国知事会議で、三重県の野呂知事は当時の小泉純一郎総理に向かって、今までいいと思ってやってきたけれど、やはりこれは間違っている、発想を変えてくださいというようなことを、発言している。

発想を変えないと、今までの延長線上で、ガス化溶融と大型の焼却炉、いくら作っても見えないごみになる。かつ、資源が枯渇していっているにもかかわらず、そういうことを税金を使ってやっている。これを、皆さんとともにぜひ考えて、変えていくことができればと願っています。

9　良いことをしたら得をする法律を

上勝町は、人口わずか2千人の町ですが、なんとかこの仕組みを変えていかないと、現実には先ほど申し上げた持続可能な地域社会にはならない。ひとつは、森林のことなど、経済的な面です。ごみの面でも、焼却をゼロと言っても、できないんですよ。不法投棄もたくさんあります。ことしの7月1日に、ゼロ・ウェイストアカデミーと地域のいろんな団体が、半日かけて不法投棄のごみ拾いをしてくれました。なんと、軽四、約50台のごみが出てきたんです。出てくると、行政もまたお金がかかるんです。処理をしなければなりませんから。不法投棄をそのまま置いておいてくれると、処理費は要らないんです。しかし、こんなことでいいんでしょうか。

日本列島全体が、いまごみ列島になっています。あの素晴らしい富士山が、世界遺産に認められないのも、原因はごみの不法投棄なんです。不法投棄は禁止されているんです。煙草も、ポイ捨て禁止なんです。しかし、どうでしょうか。不法投棄やポイ捨てが当たり前になっていることが恐ろしい。ごみは集めて焼くもの、というのが当たり前になっている。これは、ほんとうに次の時代に取り返しのつかないことになります。

いかにこの地球の温暖化を防止するか、資源をいかに大切にするか、そういったことに確実に良い知恵が出るような法律を作らない限りは、うまくいかない。良いことをしたら得をするという法律にすれば、必然的に資源は大切にされるんです。再利用、再々利用できる、そういう仕組みづくりがなければ成り立ちません。そういう努力を、皆さんにもぜひお願いしたい。そうすれば、21世紀はもちろん、22世紀の展望が開けるのではないかと思います。それは、いま21世紀に生きている人間がやらないといけない、特に高齢者はいろんな知恵を持っています。しかも、いまから50年前、60年前の気象条件などもわかっています。今と比べてどう違っていたかを、子どもたち、孫たちに伝えていただいて、資源の使い方や温暖化防止を行動で示していただきたい。そのことが、政治家の考え方を変え、法律を変えていくことになるのではないかと思います。